

「日本の伝統・文化」教材集 一



東京都教育委員会

日本の伝統・文化を学ぶに当たって

日本の伝統・文化は、長い年月を経てはぐくまれてきました。時代ごとに海外からの様々な文化が流入し、日本の中で再構成され、日本独特の文化として発展し伝承されてきたことに特徴があります。また、様々な文化を生み出す過程で日本独自の技が生まれ、創意工夫され継承されてきました。

みなさんが学ぶ「日本の伝統・文化」は、これまで受け継がれてきた伝統文化の学習だけではなく、現代においても生み出されている伝統や文化、未来に受け継いでいきたい伝統や文化のすべてが含まれていると考えてください。

「日本の伝統・文化」を難しく考える必要はありません。それは、私たちの暮らしの中のどこにもあるものです。現代に息づく身近な伝統や文化を、体験型・参加型の学習の中で身に付けていきましょう。

本書の構成と使い方について

本書は、次のように構成されています。

(1) 創意工夫されてきた技や受け継がれてきた心に関する

こと。

(2) 衣食住に関すること。

(3) 芸術や芸能に関すること。

(4) 保存や修復など「伝承」に関すること。

また、本書は次のような使い方を考えてつくられています。

興味のある単元を選択して学習する。

鑑賞したり知識を得たりする資料集として使う。

ワークシートなどを活用して、体験的に学習する。

他の教材と合わせて効果的に使う。

これから一層グローバル化する社会では、国際社会に生きる日本人としての自覚と誇りを養うとともに、多様な文化を尊重できる態度や資質をはぐくむことが大切です。

「日本の伝統・文化」の時間においては、伝統・文化の価値や日本人としての自覚を深め、日本の伝統・文化の実践力を育成することを目的としますが、何よりもみなさんが、新たな文化を創造する一人であることを意識してほしいと思います。また、江戸時代から東京が、日本の政治・経済・文化の中心であり続け、今日では、世界をリードする都市の一つに数えられるまでになっていることを再確認するとともに、身近な文化を大切に守り、伝承していただけることを願っています。

目次

〔基本的な單元〕

1	色、形、文様 風呂敷に学ぶ(1)	1
2	折る、包む、結ぶ 風呂敷に学ぶ(2)	7
3	いろいろな文字を読んでみよう	11
4	日本の遊び	15
5	箸と椀	19
6	日本の住まい	23
7	文化としての日本の音	27
8	江戸・東京を歩く	31
9	和の響きを聴く	36
10	祭りの魅力	41

〔体験・創出的な單元〕

11	アニメ絵巻をつくる 鳥獣戯画、北斎漫画からアニメへ	45
12	モダン都市東京の生活文化	49
13	身の回りの情報・メディア	53
14	出版文化の誕生を探る	55

15	儀式における音・音楽	59
16	世代をつなぐ日本のうた	62
17	大相撲と現代生活	65
18	着付け・和装	69
19	「道」に学ぶ 茶道・華道	73
20	道具と工具	77
21	生活に生き続ける江戸の文化	81
22	武道に学ぶ	87
23	将棋に学ぶ	91
24	囲碁に学ぶ	96

〔新たな文化の單元〕

25	事件・情報とメディア	101
26	現代の芸術にみる日本の伝統・文化	105
27	折り鶴を折る 野口宇宙飛行士による「宇宙鶴」プロジェクト	109
28	和からジャパンプランドの創出	111
29	日本的な感性を味わおう 手作り和楽器に挑戦！	115
30	ダンスと和楽器による総合的表現	119
31	ジャパンプार्टーの企画演出	123

〔基本的な単元〕

1 色、形、文様 風呂敷に学ぶ(1)

1 学習目標

日本古来の色、形、文様について風呂敷や手ぬぐいを通して、その視覚的な面白さについて、歴史的・文化的な点から理解を深める。また、実際に風呂敷などをデザインすることで、日本特有の様式美を学び、それらを身近に感じる。

2 学習内容

- (1) 風呂敷 (2) 風呂敷の色、柄、文様
- (3) 手ぬぐい

1 風呂敷について

日本では奈良時代から、風呂敷のような、方形の布でものを包む道具がありました。それらは平安時代では「古路毛都々美(ころもつつみ)」、や「平包み(ひらつつみ)」と呼ばれました。室町時代の、將軍足利義満が大湯殿を建てた当時の風呂敷はサウナのような蒸気風呂が一般的で、床に麻の布が敷かれていました。大名たちはこの風呂敷に入る際に脱いだ着物を布に包んだり、布の上に座って身づくろいした、という記録が残っており、これが風呂敷の由来とされています。江戸時代の初めになるとお湯を張る風呂が一般的になり、



手ぬぐいや浴衣、洗面道具を風呂敷に包んで銭湯へ通うようになりました。このようなことから風呂敷が日常使う道具となっていきま

2 風呂敷の色、柄、文様

室町時代、大名たちは風呂敷で他人のものと区別するため、目印として風呂敷に家紋を入れるようになります。商人の間でも風呂敷が使われるようになってくると、宣伝のために屋号や商標を柄に用い、商人のトレードマークとなりました。風呂敷の柄には松竹梅、鶴や亀といった吉祥紋(きつしょうもん)と呼ばれるめでたいものがあります。吉祥紋の風呂敷は、嫁入り道具を運ぶときによく見られ、現在でも使われています。また、唐草模様については、古くから瓦や仏像の台座などに用いられた唐草文様が風呂敷に使われたのが始まりで、明治30年ごろに大量生産され使われたのが由来のようです。

(1) 風呂敷の色

風呂敷の色には大きく分けて四つの種類があります。それぞれの色には違う意味があります。

- ・ 紫系 昔、位の高い人が身に付けた色。長寿やよろこび、お礼の心を伝え、また弔事でも使います。
- ・ 赤系 結婚式などおめでたい席に主に使います。
- ・ 青系 藍や紺など。日常生活のほか、弔事でも使います。
- ・ 緑系 うぐいす色や利休色など。江戸時代の流行色です。

色について ～日本の伝統色～

日本には、受け継がれてきた色彩文化があります。それを知るには日本語の色の名前がよい手がかりとなります。ここでは、日本の伝統的な色の名前が詠まれた和歌や物語を紹介します。

紫(むらさき)

紫は灰指すものぞ海石榴市の

八十の衢に逢へる兒や誰

よみ人しらす『万葉集』巻十二

奈良時代、聖徳太子が制定した冠位十二階では冠位を示すために色が用いられていましたが、その最上位にあてられた色が紫でした。紫の染色には日本に自生する紫草という植物の根を染料としていました。これを紫根と呼び、和紙に包んでおくと、その和紙が淡く染まってしまうことから、平安時代には紫が「ゆかりの色」と呼ばれました。当時の人々は、紫のように、想つ人を自分の色を移して染めあげてしまいたい、という思いを歌に詠んでいます。

紅(くれなゐ)

いふ言の恐き国ぞ紅の

色にな出でそ思ひ死ぬとも

大伴坂上浪女『万葉集』巻四

平安時代以降、近世に至るまで濃い紅花染の赤はとりわけ女性のおこがれの色でした。古来の紅の名称「くれなゐ」は、中国長江地方の呉の国から渡来した藍(当時は藍は染料の総称でした)を意味する「呉の藍(くれのあい)」に由来します。

空色(そらいろ)

空いろの紙のくもらはしまし、
書い給へり

紫式部『源氏物語』薄標

日本語の中に、空色、水色、草色などの事物の名前を借りて特定の色を表現しようとするのが定着したのは平安時代のことです。しかし、同時期の清少納言の『枕草子』では空も水も現在の青を意味する「碧(みどり)」と表現されていて、区別がありません。

浅緑(あさみどり)

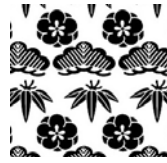
浅緑いとよりかけて白露を
珠にもぬける春の柳が

僧正遍昭『古今和歌集』

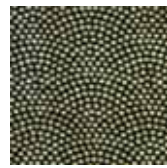
春に芽を吹く若葉の黄緑色は、『万葉集』の時代から浅緑と呼ばれました。その浅緑を代表する植物は柳であり、正月から春まで着用される早春の色でした。

(2) 風呂敷の柄

風呂敷の柄には無地のほか、様々なものがあります。



松竹梅
吉祥紋の代表的柄



絞小紋
江戸時代、武家の袴(かみしも)に使われた伝統的図柄



宝づくし
福や徳を招く八つの宝物をちりばめた柄



唐草
風呂敷の柄として大変有名。四方八方に伸びていくつるを表したもので長寿や繁栄の意味があります。

(3) 風呂敷の形、素材

風呂敷は、物を包むのに用いる方形の布のことです。熨斗袋(のしぶくろ)などを包む小さなものから布団まで包める大きなものまで、大きさも様々です。幅(はば)という長さの単位を基本として、大きさを表します。

また、風呂敷の素材には、大きく分けて三つの種類があります。

- ・ 絹 光沢があり、正式な場で使います。代表的なものにちりめんがあり、一面に「しば」と呼ばれる細かい凹凸の入った絹織物のことで、包むものの形に合わせて伸びたり縮んだりする性質

質をもっています。

- ・ 木綿 丈夫で扱いやすく、大きなものや重いものでも気楽に運ぶことができます。

- ・ 化学繊維 レーヨンやナイロン、ポリエステルなど

《参考文献・資料等》

- ・ 宮井株式会社『エコライフにも役立つ！ふるしき大研究 ぐらしの知恵と和の文化』二〇〇五年 PHP 研究所
- ・ 中江克己『色の名前で読み解く日本史』二〇〇三年 青春出版社
- ・ 『GLJ books 和シリーズ つつむ』二〇〇三年 学習研究社



コラム 東京の色「江戸紫」



「江戸紫」は江戸時代、江戸郊外の武蔵野、現在の埼玉方面から東京の多摩一帯で栽培された紫草を原料として、神田などの紫染職人たちが盛んに染めたものです。東京の井之頭公園の弁天堂境内には紫灯笼(むらさきとうろう)と呼ばれる一対の石灯笼があり、「江戸紫」を染め、制作した職人などの九十一人の名前が刻まれています。また「江戸紫」といえば、歌舞伎十八番の「助六」が締める鉢巻の色としても有名です。

揚巻の助六 市川團十郎(出典：国立国会図書館貴重書画像データベース)

3 手ぬぐい

風呂敷の他、日本には手ぬぐいがあります。

(1) 手ぬぐいとは

安土桃山時代から江戸時代の初期にかけて、庶民の布として木綿が登場し、木綿文様手ぬぐいが広まりました。普通、一幅の木綿を三尺(約九十センチメートル)に切ったもので、模様や文字が染め出してあります。

江戸時代には実用とおしゃれを兼ね備えていた手ぬぐい、現代の暮らしにも是非加えたいものです。

(2) 「染絵手ぬぐい」

江戸時代の文献を資料に川上桂司氏(染絵手ぬぐいふじ屋)が復活させた「手ぬぐいあわせ」の図柄です。粋や洒落(しゃれ)、風刺に富んだ大胆な構図の手ぬぐいは、現代の私たちの心もつかみます。



惟一(これいち)道成寺格子
全体を鐘に見立てています。

蛇の目傘

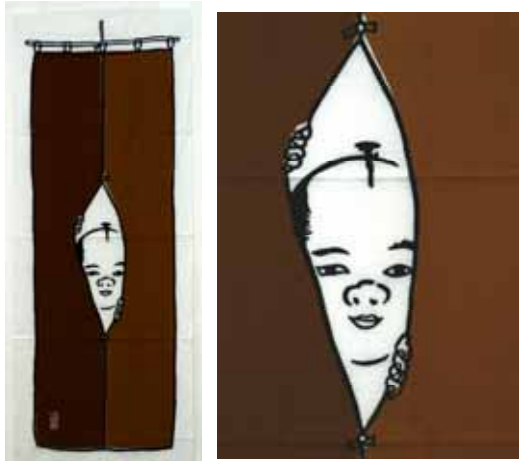
一枚表裏に合わせると、傘開きの暖簾(のれん)になります。



志谷 熊野染

大きな目は鯨の目。捕鯨で有名な熊野灘を洒落て熊野染といえます。川上氏は「め鯨は横に飾って立てない」としています。発想が奇抜で斬新です。

(資料提供/協力 染絵てぬぐい ふじ屋)



山東京伝 京伝手ぬぐい

顔を覗(のぞ)かせているのは江戸の戯作者山東京伝の『江戸生艶気蒲焼(えどうまれっわきのかばやき)』の主人公の若旦那。見ていると思わず笑みがこぼれます。

学習課題 風田敷や手ぬぐいのデザインをしてみましよう

テーマ

色) (

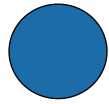
- ・ 具体的な使用場面を考え、年中行事、季節、オリジナルの家紋、トレードマーク、好きな模様などをデザインしてみましよう。
- ・ 選んだ色の名前や模様の由来について調べてみましよう。
(歴史上の扱い、色の元となる染料や顔料、過去に詠まれた句や歌など)
- ・ 使用した色をもとに、俳句や歌を詠んでみましよう。

〔生徒作品例〕

テーマ

あさり（家紋をイメージして）

色（舂花色（ますはないろ））



5月も半ばになり暖かさも増してくると、幼いころに家族

で木更津の海へ潮干狩りに行ったことを懐かしく思い出す。

潮干狩りをしていると、たまにあさりが見つかることがあり、

それがとてもうれしかったことを憶えている。この風呂敷は、

そのときの思い出をテーマにデザインした。

【選んだ「色」の名の由来】

舂花色・花とは露草の青花のこと。五代目團十郎の家紋

が三舂（三つ重ねの舂形）だったことから、江戸時代、流行

色となっらしい。

2 折る、包む、結ぶ 風呂敷に学ぶ(2)

1 学習目標

日本の伝統的な「折る、包む、結ぶ」という行為やその意味について学習し、日本独特の美意識、様式美から、その精神性、心を学ぶ。また、それらを体験することによって日常生活に、日本の伝統・文化を積極的に取り入れる。

2 学習内容

- (1) 「折る、包む、結ぶ」という行為
- (2) 現代の折形
- (3) 風呂敷の使い方

1 折る、包む、結ぶ

私たち日本人は、知らず知らずのうちに、多くの「折る」「包む」「結ぶ」という行為を日常的に行っています。ちょっとした品物やお金を手渡すときに、紙で折り包むのは日本人だけであると言われています。そこには、相手への思いやりや、「礼」の心、ものを慈しむ心が込められています。現在使われている祝儀袋や、風呂敷などは、このような日本人の美意識から生まれたものです。

かつて「包む」行為の目的は、ものを運びやすくする、大切なものを集めて保存することでした。「包む」という言葉は、「苞(つつ)」という語源をもち、「わらなどを束ねてくるみ込む」という意味です。また「包む」には、「かくす」「ひめる」「さえぎる」という意味も含

まれます。産着やおくるみで赤ん坊を包むようにして災厄から守ったり、神聖なものを災いから隠したり、閉じこめる行為も意味することから「慎む(つつしむ)」の語の派生であるとも言われています。現在私たちが当たり前のように行っている「包む」という行為にも、も

のことを大切に思う気持ちが受け継がれています。

また、紙などを「折る」ことで、ものを「包む」こともあります。その一つに室町時代に制定された武家の礼法の中に「折形(おりがた)」と呼ばれる決まり事があります。これは贈り物を和紙で包む際のしきたりで、包み方も細かく定められ、中の品物が分かるよう、折り目正しくいろいろな折り方で包まれました。江戸時代に入ると、折形は町人を含む一般庶民にまで浸透し、女性のために書かれた書物でも教養の一つとされ、昭和の初めには折形の数はおよそ数千あったと言われています。

折形で包まれた紙の上には、よく水引(みずひき)が結ばれます。また、風呂敷も、ものを包むとき、「結ぶ」行為が自然と行われます。「結び」の語源は「陰陽相対的なものが和合して新しい活動を起こす」といわれ、日本では生まれた子どものことを「むすこ」「むすめ」と呼びますが、これは「むすびひこ」「むすびひめ」という言葉の略称です。このように、結ぶことによって、更なる力を発揮すると考えられてきた「結ぶ」という行為は日本でとても大切にされました。日本における伝統的な「結び」は多種多様です。例えば、握り飯を丁寧にする語を「おむすび(お結び)」ともいいますし、先に挙げた水引は、本来贈答品を包んだ上つづみを結びとめるために用いられたものです。贈り物をしっかり結ぶことで、「贈る気持ちと真心が先方に届くまで、決してほどかない」という意味をもたせ、また相手への真心と

敬意をこめました。

現在では「包む」「折る」「結ぶ」行為や形も多様化してきていますが、その基本となる心や精神は変わることはありません。

2 現代の折形(おりがた)について知る

折形は「差し上げる」「気持ちを示すもので」「包む」のほか、「つける」「巻く」「敷く」「添える」という手法を使うこともあります。また、いったん折り始めたら途中で刃をいれることはありません。これは「切る」ことを嫌う武家の礼法に由来します。また、包みの紙の右側を手前にすることを「右前」といい、これは吉を示します。

その他、折形には「におい」という襲(かさね)の色目の紙があり、吉の包みでは赤いにおい、凶の包みは黒や灰色を使います。市販の熨斗袋(のしぶくろ)などを利用して紙幣を包むときも、吉と凶がありません。吉の紙幣包みは折りあげて終わり、また逆に凶は折りさげるので、注意が必要です。水引は和紙からつくった紙繕り(こより)に水糊(みずのり)をつけ乾燥させた紐のことです。水引の結び方にもいくつかの決まり事があります。「両(もろ)わな結び」はその代表例です。一般的に格の高い贈り物ほど水引の本数が多くなります。また「結び切り」は、同じ事を繰り返さないようにと、主に凶事に使われますが、婚礼やお見舞いにも使われます。

「ラム 熨斗(のし)について

現代に伝わる折形の中で、暮らしにもっとも身近なもののひとつに、お祝いやお礼を包む際に使う熨斗(のし)包みがあります。袋の表側の右上にある小さな包みのことを、熨斗(のし)といいます。これは伝統的な熨斗のかたちですが、現代までその形を変えてきたものです。お中元やお歳暮にも、この熨斗が見受けられます。熨斗とは、本来アイロンのような、圧力をかけてものを伸ばす道具のことを指し、転じて薄く伸ばしたものを和紙で包み、同じく和紙で包んだ進物に添えること、そのものを指すようになりました。この薄く伸ばされるものは昔、鮑(あわび)の肉が使われました。鮑の肉を使う起源については諸説ありますが、人々は母なる海の恵みへの畏敬と、天地万物の豊饒(ほうじょう)と繁栄を願い、贈り物に聖なるいただきものを添えたのではないのでしょうか。



熨斗(のし)



鮑(あわび)

学習課題1 折形を折ってみましょう

折形で用いる折りには、山折りと谷折りしかありません。しかしその組合せで、和紙を様々な「かたち」にすることが出来ます。一枚の和紙が生み出す造形は「折る」ことから「畳む」「拡げる」ことにも連なっています。周囲を見渡せば、時節の飾り物や、折りの象徴、贈答品の包みなどが、和紙を折ることによってつくられてきたことが分かります。みなさんも和紙でいろいろな形を折ってみましょう。



松飾り

年始には、伸びやかな生命の象徴である若松（小松）がふさわしいものとされています。松に和紙を巻き、右前に重ね、麻苧（あさお）を結んであります。



年玉包み

お年玉を入れる袋に現代ではポチ袋がありますが、これは昔から使われていた貨幣包み、紙幣包みが簡略化されたものです。お年玉だけでなく、カードやアクセサリなどの小物を渡すときにも使えます。



祝書包み

正月には祝書を使います。箸の素材は白木の柳（ミズキ）です。春に大変早く芽吹くことから、生命力の象徴として尊ばれている植物です。



淡路結びの慶事用紙幣包み

贈る人へ心を込めて祝儀包みを折りましょう。

（資料提供／協力 折形デザイン研究所）

コラム 宇宙で活躍する折り・・・「ミウラ折り」

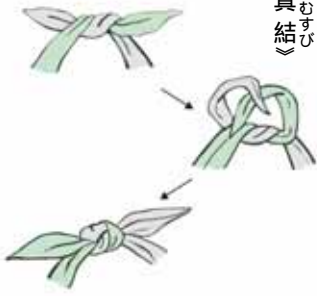
植物の芽や花、昆虫の羽根が折りたたまれていることの観察や研究から生み出された「ミウラ折り」は三浦公亮氏が考案した、折りたたみ構造です。その特性は、一度折った折り目を再び折り返す「折り紙」手法で、対角線部分を持って、左右に引つ張ると、一瞬にして広がり、また一瞬でたたむことができる、というものです。この「ミウラ折り」は、宇宙空間で大きなパネルを作るために、パネルを折りたたんでロケットに搭載する際に大変有効で、太陽系探査衛星「はるか」や「スペースシャトル」の「ソーラーパネル」などに利用されています。

学習課題2
風呂敷を使って

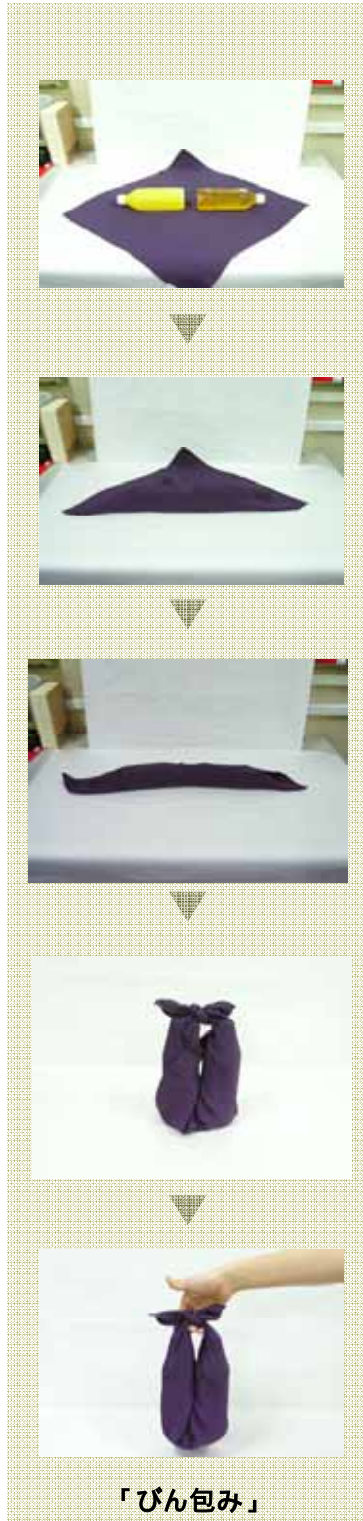
現在、風呂敷は日本人の知恵が詰まった身近な暮らしの道具として見直され、レジ袋や紙袋に代わるものとして、環境保全の一つの方法として注目を集めています。

風呂敷の使い方には決まりはありませんが、基本的な結び方に、真結（まむすび）があります。真結を覚えて、様々な布で、いろいろな物を包んでみましょう。

まむすび
真結



「お使い包み」



「びん包み」



「すいか包み」の応用

3 いろいろな文字を読んでみよう

1 学習目標

江戸時代までの日本における文字の歴史と多様性について学ぶ。

日本人は中国の文字である漢字を基にしながら、平仮名・片仮名を創出し、豊かな文字文化を形成してきた。日本の文字文化の歴史を学ぶとともに、平仮名のくずし字を実際に読むことで、古典作品や歴史についての新たな視点を身に付け、現代に残る豊かな文字感覚についても学習する。

2 学習内容

- (1) 日本における文字の歴史
- (2) 平仮名のいろいろ
- (3) 現代に残る様々な文字

1 日本における文字の歴史

私たちが様々な伝統や文化を継承し理解していくために、「文字」はなくてはならない要素であり、道具であると言えます。特に日本人は、漢字・平仮名・片仮名の三種類の文字を組み合わせて用いるという、世界でも稀(まれ)な文字の使い方をしています。漢字は、一字一字が一定の意味を表す表意文字、平仮名・片仮名は、一字一字が音声(音韻)を表す表音文字です。私たちは、これらの文字を文章や文

脈によって使い分けることで、視覚的に文章の意味内容をとらえやすくしたり、外来語を抵抗なく吸収し利用したりすることができま。古代の日本では、文書なども漢字を用いて記録していました。しかし、人名や地名などの固有名詞、日本人の情感をともなった歌や歌謡、さらには日常使われている言葉表現するために、一つの音を表す文字を必要としました。「万葉仮名」はその古い例です。

やがて平安時代になると、漢字だけの文章ではなく、漢字と片仮名を交えた文章や、和歌や物語を書き表すために平仮名で書かれた文章が登場するようになります。片仮名も平仮名も、漢字の一部を用いたリ、漢字全体を書き崩したりすることによって成立しましたが、漢字とは違って、完全に表音だけを目的とした文字として定着することになりました。

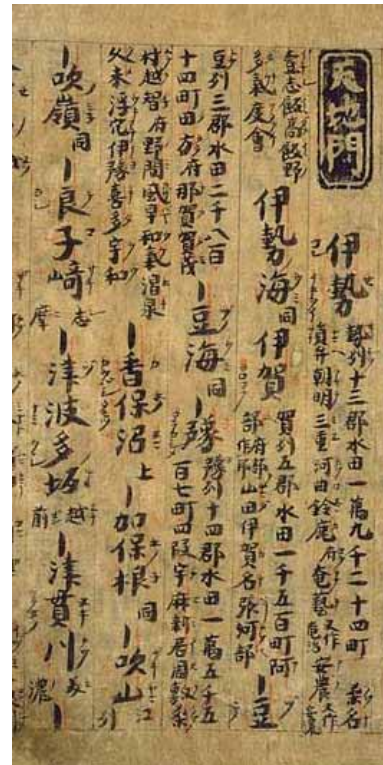
主として片仮名は、もともと漢字だけで書かれていた文章を日本的に読み下す、補助的な文字として使われ、公式の文書や仏書などに多く見られます。また、平仮名は草書体の漢字を更にくずした、優美な書体をもち、和歌や物語などの文学作品などに多く用いられました。現在では漢字片仮名交じりの文章はあまり見られず、漢字平仮名交じりの文章が普通となり、片仮名は主として外来語を表記する場合に用いられます。

学習課題 1 古典に書かれた文字を調べてみましょう

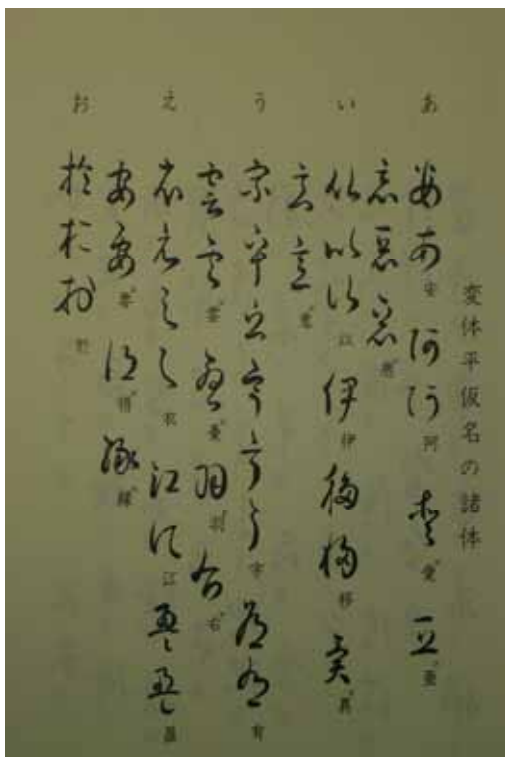
日本の文字の歴史を調べ、『万葉集』や『源氏物語』などの古典作品が、もともとどのような文字で書かれていたのか、確認してみましょう。



様々な筆跡（『手鑑』国立国会図書館所蔵）



古辞書（国立国会図書館所蔵）



字母のいろいろ（『変体平仮名演習』）

2 平仮名の成り立ちとくずし字

平仮名の元になった漢字を「字母」と言います。今では、平仮名の「あ」といえば、漢字の「安」を字母にしたあ、「い」も字母「以」をもとにしたい、というように、一つの字母に一つの平仮名が対応しています。しかし、江戸時代までは、現在用いられている一つの平仮名に対して複数の字母があり、また、漢字を平仮名にする「くずし方」も様々でした。

現代の私たちから見ると、一見複雑で煩わしいものにも思えますが、一つの音を表すにも気を配り文字を使い分けていたところに、日本人の美意識を感じ取ることができます。また、様々な「くずし字」を読むことによって、活字で読むのとは一味違った古典の世界を知ることができます。

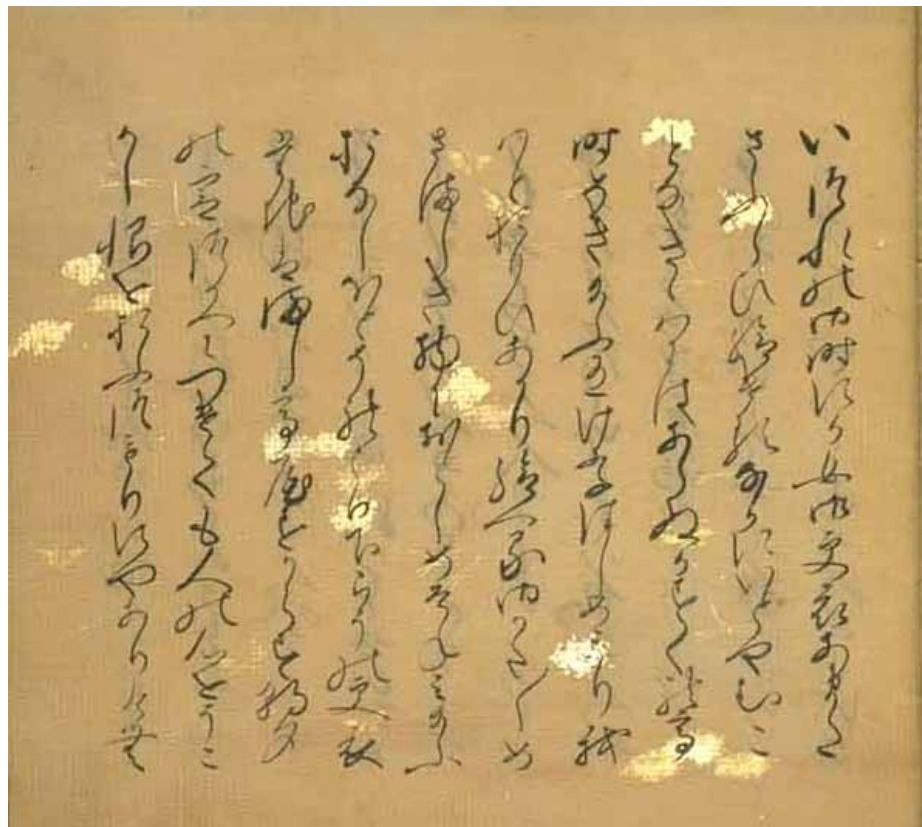
学習課題2 「くずし字を読んでみましょう」

美術館や博物館で、古い資料や浮世絵を見て、様々なかたじけなくされた平仮名を読んでみましょう。

学習課題3 「変体仮名」を学んで、実際に文章を読んでみましょう

(1) 既に国語(古典)の授業で学習した素材を、改めて原本で読み直しましょう。平仮名に慣れたら、漢字をくずした文や文章にも挑戦してみましょう。

(2) 現在でも「くずし字」は使われています。店の看板や箸袋など、私たちの身の回りを注意深く観察することによって、現代にも引き継がれている「くずし字」の利用のされ方と、そのデザイン性を発見しましょう。



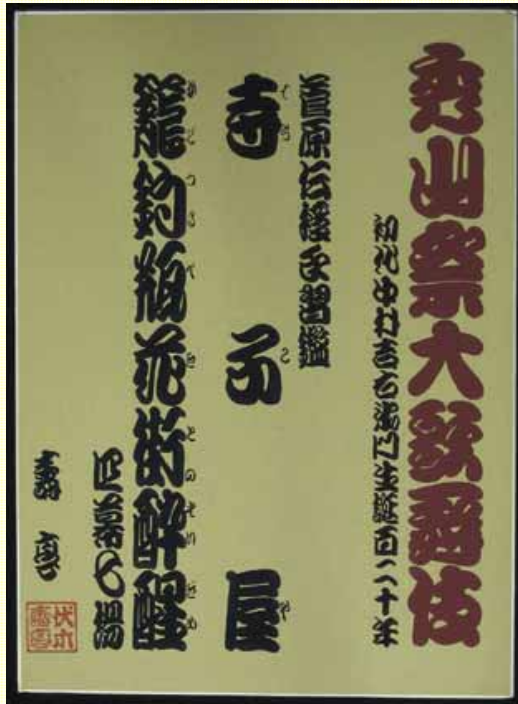
『源氏物語』桐壺(国立国会図書館所蔵)

3 文字の遊び・デザイン

文字の多様性を活かしながら、文字を用いた遊びや、デザイン性豊かな文字が創り出されました。今でも目にするのできる、歌舞伎における勘亭流の文字や相撲に使われる相撲文字はその名残りです。また、そうしたデザイン性は、私たちが使うパソコンの「フォント」にも取り入れられ、日本の伝統的な文字文化は最先端の技術と融合しています。

コラム 勘亭流

歌舞伎の番付・看板などを書く、丸みを帯びた太筆の書体が「勘亭流」です。江戸中村座の手代「岡崎勘六(号、勘亭)」から始まったと言われています。



勘亭流の文字（伏木寿亭 筆）

〈参考文献〉

- ・西野嘉章編『歴史の文字 記載・活字・活版』東京大学出版会、平成八年（一九九六）
- ・児玉幸多編『くずし字用例辞典』東京堂出版、平成五年（一九九三）
- ・松尾聡編『変体平仮名演習』笠間書院、昭和四十四年（一九六九）
- ・アダムカバット編『妖怪草紙 くずし字入門』柏書房、平成十三年（二〇〇一）
- ・中嶋隆編『くずし字速習帳 近世版本篇』早稲田大学文学部、平成十七年（二〇〇五）



文字遊びの本

4 日本の遊び

1 学習目標

遊びを通してことわざを学ぶことをなりたいとした「いろはかるた」から日本人の工夫について学ぶ。

また、実際に「かるた」をつくり、できた「かるた」を使って遊ぶことで、日本人の感性について考える。

2 学習内容

- (1) 「いろはかるた」
- (2) 「いろはかるた」のことわざ
- (3) 「いろはかるた」を使った企画

1 いろはかるた

読み札を読み上げ、絵札を取り合う「いろはかるた」は、江戸時代の天明年間（一七八一〜一七八八年）ごろ上方で成立し、文化年間（一八〇四〜一八一七年）には江戸でもつくられました。上方と江戸の「いろはかるた」を比べてみると、同じ札もありますが、それぞれ独自のものも見られます。

	江戸	上方
い	犬も歩けば棒にあたる	
ろ		論語読みの論語知らず
は		針の穴から天覗く
ほ	骨折り損のくたびれ儲け	
へ	屁をひって尻つぼめる	
と		豆腐にかすがい
る	るりもはりも照らせば光る	
ね	念には念をつがへ	
ら		来年のこと言えば鬼が笑う
糸	縁は異なるもの	
も	門前の小僧習わぬ経を読む	
京		京に田舎あり

学習課題1 「いろはかるた」の違いを知りましょう
空欄にあてはまることわざを入れてみましょう。

2 「いろはかるた」のことわざ

「いろはかるた」に見られることわざには、日本人の知恵が凝縮され、現在でも私たち行動規範を形作っています。

学習課題2 「いろはかるた」をつくりましょう

(1) 「ことわざ」をつくりましょう。

(2) つくったことわざに合わせて絵札を考えましょう。

(3) なぜ、上のような「ことわざ」と絵札を考えたのか、説明しましょう。



ムササビも木から落ちる



富士にも上がっている

エベレスト山（別名 チョモランマ）

生徒作品例

3 「いろはかるた」をつくって遊ぶ

クラス全体で文字を決め、「いろはかるた」をつくりましょう。

(1) 和紙と墨などを使って描く。

材料：和紙、墨、水彩絵の具など

(2) 表装の技法を使って、絵札をつくってみましょう。

材料：大和のり、表具用刷毛、色和紙

学習課題3 「いろはかるた」を使った企画をしましょう

次の場面から一つの場面を想定して、「いろはかるた」の遊び方や活用の仕方を企画してみましょう。

- ・ ホームルームで
- ・ 学校行事として
- ・ 地域交流活動として

企画

コラム 「かるた」が地域文化を活性化する

阪神・淡路大震災後、神戸市長田区の御菅（みすが）では、御菅の町をテーマにした「御菅かるた」がつくられました。他の町にはないけれど、御菅の各家庭には同じものが一つずつある、という思いから、『御菅百人百色かるたを作ろう！』と企画されました。五十音の読み札と絵札を一人一枚ずつつくり、百人で一セットのカルタをつくる企画です。百人を集めることは大変でしたが、平成十六年（二〇〇四）には、一三三人の手でオリジナルの「いろはかるた」がつくり上げられました。



「震災前からこの町にいた人と震災がきっかけで新しく住民となった人、震災とは直接関係なくこの町で暮らすことを選んだ人、結婚して住民となった人、震災後この町で生まれ育った子どもたち、仕事場がここにある人、そしてボランティアとしてこの町に来ている人など、いろんな人が生活し、仕事をしています。それぞれがこの町のことをどう思っているのか、個人の視点から見た御菅のまちをテーマに句や絵を集めたら、今の御菅の魅力が見えてくるんじゃないか…。」と「御菅かるた」の発案者は語っています。

【発展学習】

- 1 自分の住む地域の特色を生かした「いろはかるた」をつくってみましょう。
- 2 「いろはかるた」のほかに、日本にはどのような遊びがあるか調べてみましょう。そして工夫されているところ、時代や地域によってみられる違いなどを見付けてみましょう。
- 3 日本の遊びをヒントに、新しい楽しみ方を考えてみましょう。

〈参考文献・資料提供等〉

- ・神戸市長田区御菅町五の九十二の二 みくら五
- ・阪神・淡路大震災まち支援グループ
「まち・コミュニケーション」
- ・都留文科大学

5 箸と椀

1 椀と箸

昔話「一寸法師」を読んだことがありますか。その中で、一寸法師が椀の船に乗り、箸の櫂(かい)で都に上っていくシーンがあります。椀は船として水に浮いていますので、木製であったと考えられます。昔話に描かれているように、日本では古くから木製の椀が使われてきました。

日本では、食事をするとき、器を口につけます。これは、先のがった二本の棒、つまり箸で食事をするために出来た作法です。木製の椀は、温かい物を入れても冷めにくく、熱さが手に伝わらないなどの利点があります。また、木のぬくもりと質感は唇には優しいのかもしれないかもしれません。



重なった椀に御飯、汁物、おかずなど入れたものです。三つ重ね、四つ重ね、五つ重ね、六つ重ねなどがあります。

学習課題1 食器について調べてみましょう

(1) 現在、日本ではどのような食器が使われていますか。家庭で使っている食器、またレストランや食堂などで使われている食器にはどんなものがあるか調べてみましょう。

食器の名前と、使われている素材を書き出してみましょう。

家庭で使っている主食用の食器を持ち寄り、大きさを測ってみましょう。また食器の重さや形、手触りや口当たりにも着目して、特徴を調べてみましょう。

(2) 日本の食器の歴史を調べてみましょう。また、その食器を使って人々はどのような食事をしてきたかについてもまとめ、現代と比較してみましょう。

2 箸 中国、韓国との比較

中国、韓国、日本では、食事に箸を用い、同じ「箸文化圏」に属します。しかし、箸の素材と形、使用目的はそれぞれの国で異なります。

1 学習目標

日本の食事で用いられている食器について理解を深める。特に、国によって形が異なる箸に注目して比較し、更に美しい箸の使い方について学ぶ。

また自分に合った、持ち運び可能な箸を作る。

2 学習内容

- (1) 椀と箸
- (2) 日本の食と食器
- (3) 箸の違い 中国、韓国との比較
- (4) 箸の作法
- (5) 箸の製作

中国の箸は長く、先は丸いですが尖ってはいません。箸の素材として古くは象牙（ぞうげ）などが使われましたが、今はプラスチック製が多く用いられています。箸は家庭の中でも個人の物ではなく、共通に使われます。またスープなどを食すときには、磁器製の匙（さじ）を使います。

韓国では、金属製の箸を使います。昔は、金や銀で箸が作られてい



中国の壺に描かれた箸を使う親子

ましたが、現代では、真鍮（しんちゅう）製からステンレス製へと変わっています。金属は重たいため、韓国の箸は比較的短く、平たい形です。食事では、おかずを自分の所に取ってくるときに箸を使い、食べ物を口に運ぶときにはスプーンを使うのが一般的です。また韓国では器を持って食べるのは好ましくない（行儀が悪い）とされており、これは日本とは正反対です。

学習課題2 食器について更に調べてみましょう

(1) 食事をするとき用いるものによって、世界は「箸 + スプーン文化圏」、「フォーク + ナ이프 + スプーン文化圏」、「手食文化圏」の三つに分けることができます。どの国や地域がそれぞれの文化圏に属するか、調べてみましょう。

(2) 現在の日本では、和食の他、中華や洋食などバラエティに富んだ食事をすることができ、その食事に合わせて様々な食器を使ってい



中国の箸（象牙製と黒檀製）



韓国の箸とさじ（銀製）

ます。食事の内容によって、箸、スプーン、フォーク、ナイフ、手食などをどのように使い分けているでしょうか。次の食事に使うものを挙げてみましょう。

- ・寿司
- ・焼き肉
- ・お好み焼き

学習課題3 箸の作法について調べてみましょう

箸の使い方をいつ、だれに習いましたか。また、箸を美しく使うことが出来ますか。

箸を使うときには、してはいけないとされている用い方があり、それぞれに名称が付けられています。次の説明にあてはまる名称を選び、箸の作法について確認しましょう。

- ・ いったん取りかけてから、他の料理に箸を移すこと。
- ・ 食器に盛ってある料理を上から食べないで、箸でかきまわして探すこと。
- ・ どの料理を食べようかと迷い、料理の上をあちこち箸を動かすこと。
- ・ 初歩的な持ち方で、攻撃を意味する持ち方のこと。
- ・ 箸を持ったまま、他の食器を持つこと。
- ・ 一度料理に箸をつけておきながら、食べずに箸を置くこと。
- ・ 箸を持ったまま、お替わりをすること。
- ・ 箸を料理に突き刺して食べること。
- ・ 箸の先から汁をばたばたと落とすこと。
- ・ 箸をそろえてスプーンのようにして料理をすくい上げること。
- ・ 食器の縁に口を当てて、料理を箸でかき込むこと。
- ・ 口に頬（ほお）張ったものを箸で奥へと押し込むこと。
- ・ 箸先を噛（か）むこと。
- ・ 口の中のものを箸先でもぎ取ること。
- ・ 箸先に付いた汁などを振り落とすこと。
- ・ 食事中に箸を床に落とすこと。

- ・ 食器の中で箸を洗うこと。
- ・ 食器やテーブルを箸で叩（たた）いて人を呼ぶ合図をすること。
- ・ 箸で食器を手前に引き寄せること。
- ・ 食事の途中で箸を食器の上に渡し置くこと。
- ・ 食事中に箸で人を指すこと。
- ・ 箸を下に置かずに、口にくわえたまま手で食器を持つこと。
- ・ お膳の向かいにある料理を手で取り上げずに、箸で取ること。
- ・ 仏箸とも言われ、死者の枕元に備える枕御飯のこと。
- ・ 両手で箸を挟み、拝むようにすること。
- ・ 箸と箸で食べ物のやりとりをすること。
- ・ 食器の上で二人で一緒に同じ料理を挟むこと。
- ・ 木と竹でできた異質の箸を、一対の箸として用いること。

立て箸	刺し箸	迷い箸	込み箸	涙箸	かき箸
指し箸	探り箸	膳ごし	握り箸	持ち箸	渡し箸
受け箸	空箸	かみ箸	もぎ箸	洗い箸	寄せ箸
違い箸	くわえ箸	横箸	落とし箸	拝み箸	
二人箸	振り箸	移り箸	箸渡し	たたき箸	

3 割り箸と環境問題

日本では、外食などで割り箸が用いられています。日本の割り箸の消費量は、一年間で約二五〇億膳と言われています。これは、一人当たり一年間で約二二〇膳位使う計算です。かつて割り箸は日本の間伐

材を使って作られていましたが、現在は原材料の多くを中国から輸入しています。日本人が割り箸を使うことで他国の森林を破壊し、さらには砂漠化を進めているとしたら、これは大きな問題です。

学習課題4 割り箸について考えましょう

一週間のうちに、使った割り箸の数、また、お店で受け取った割り箸の数を記録し、クラス全体でどのくらいの量になるか調べ、割り箸の使用について話し合ってみましょう。

(3) 握る部分を持ちやすくするなど、使いやすいうように工夫しましょう。

写真は、先に漆塗りされた素材を使った箸の制作例です。漆塗り以外の部分に、絵の具で装飾し、透明塗料を二回塗って完成させます。

学習課題5 自分の箸を作りましょう

地球環境を守るために、自分の箸を作り、持ち歩きましょう。

(1) 箸を作る原材料を決め、それをもとに、箸のデザインをしましょう。

(4) 箸を携帯するための、箸袋を作りましょう。

(2) 自分の手に合った箸の長さを決めましょう。

箸の持ち歩き安さ、丈夫さなどを考えながら箸袋をデザインしましょう。

作品例



先に漆塗りした箸の素材



自由に絵を書いた作例



完成した例 箸置と共に



包み方も工夫しましょう

6 日本の住まい

1 学習目標

日本人の伝統的な住宅様式である寝殿造・書院造・民家・町家・武士住宅の特徴を学んだ上で、東京都内に現存する歴史的な住宅を選んで見学する。

こつした学習を通じて、住宅の中ではよくまれた伝統や文化あるいは住まいの仕方を実際の空間とともに感覚的に理解する。

2 学習内容

- (1) 寝殿造
- (2) 書院造
- (3) 庶民の住まい
- (4) 調査発表(歴史的な住宅における住み方や、伝統文化を想像する)

1 変貌する住まいの姿

風鈴の涼やかな音色は日本の夏の風物詩です。しかし、近年、その音色を聞く機会は少なくなりました。最近ではエアコンを多用し、頑丈なアルミサッシで自然の風を遮断しているためと考えられます。こつした住まいの環境面ばかりでなく、家族の人数やプライバシーの在り方などが、ここ数十年で劇的に変化し、結果として住まいの姿もまた大きく変貌しました。

現在、新築住宅の多くは「LDK」タイプと呼ばれる間取りになっています。「LDK」とは、LDKの個室(リビング)・Living room・食堂(Dining room)・Kitchen)・台所(キッチン=Kitchen)を兼ねた大きな部屋から構成される住まいの形式で、昭和三十年代以降に広まりました。

「LDK」タイプが普及したために、日本の住まいは画一化したといわれています。その一方で、下町などにみられる店舗や工場と住居の併用住宅は「LDK」タイプではありません。昭和三十年代以前の古い住まいも全く違う構造をしています。このように、画一化したとはいいながらも、まだ日本には多様な住まいと暮らし方が存在しています。

住まいのかたちと、そこでの暮らし方には、気候風土などの環境条件の他に、長い歴史の中で培われた文化や社会制度が反映しています。これまで日本人は、どのような住まいに暮らししてきたのでしょうか。日本の住まいを見ていきましょう。

2 寝殿造

現在の京都市中心部に該当する平安京(七九四年遷都)では、優雅な貴族文化が展開しました。そうした貴族文化の舞台となったのが、貴族たちが暮らした「寝殿造(しんでんづくり)」と呼ばれる住まいです。

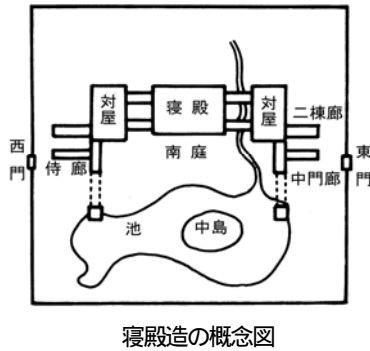
平安貴族が理想とした寝殿造の姿は次のようなものでした。まず、約二〇メートル四方の敷地を塀で囲って街路から遮断します。敷地の中央北側に「寝殿」と呼ばれる大型の建築を建て、その南側には広い庭を挟んで池を配し、寝殿の東西には二つの「対屋(たいのや)」を対称的に設け、寝殿と対屋は「渡廊(わたなぎ)、また対屋からは出入り口である「中門廊」を突き出し、その中門廊には「二棟廊」や「侍廊」を接続させます。

寝殿造の理想はこのような左右対称形でしたが、実際に作られた寝殿造は東西のうちどちらかにしか対屋がないものが大部分でしたし、北側に対屋があるものもありました。寝殿造は、年中行事や遊技あるいは各種儀式などを行う平安貴族の社交場でした。

こつした様々な催し物を可能にしていたのが、寝殿造に特有な「舗敷(つらひ)」という考え方です。寝殿や対屋は板敷きの大型の建物で、室内にはほとんど壁がないために普段はがらんとした殺風景なものでした。しかし、いざ行事や儀式を行う際には屏風(びょうぶ)・衝立(ついで)・簾(すだ

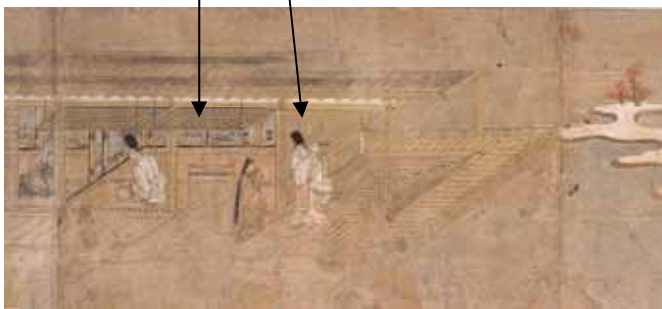
れ(・御帳・みちよう・敷物・畳などの建具が置かれて、行事にふさわしい空間が創られました。このように、状況に応じて臨機応変に変化しながら住まいを使いこなしていく考え方が舗設です。

寢殿造にはもう一つ大きな特徴があります。それは住まいの内側と外側が遮断されていない点です。寢殿の広い南庭に面した部分には、「部(しとみ)」と呼ばれる回転式の建具がならび、これを開けてしまえば建物の内外は完全に一体化したのです。寢殿や対屋の南側に広がる庭は住まいの一部分だったのです。また、寢殿や対屋の北側や渡廊との接続部分には木々が植えられ水が流されるなど、異なる趣向の庭が設けられ、暮らしの中の憩いの空間となりました。こつした屋内と屋外との近い関係は寢殿造の住まいで生まれ、その後の日本の住まいに継承されました。



寢殿造の概念図

部(しとみ) 襖(ふすま)



『住吉物語絵巻』(東京国立博物館所蔵)

3 寢殿造から書院造へ

貴族の力が衰えてくると年中行事や各種儀礼も廃れ、舗設によって変化する住まいではなく、あらかじめ室内を壁・襖・障子で仕切って「部屋」に分割した住まいが出現してきます。そして、次第に部屋には「畳」が敷き詰められはじめます。

畳は、寢殿造では人間が座る位置に一枚だけ敷かれるものでしたが、部屋の出現とともに四周に畳を巡らす「追い回し敷き」が行われるようになり、室町時代には、部屋一面に畳を敷く形式が生まれました。

畳は日本の文化を考えるに当たって、大変重要ですが、ヨーロッパや中国では、住まいの床面を外の地面の延長と捉えていますから、室内でも靴を履き椅子に座ります。それに対して、畳が普及した日本の住まいでは、屋内に入る際には履物を脱ぎ、清潔な畳に直接座るために椅子は普及しませんでした。小部屋に畳を敷き詰め、そこに膝(ひざ)をつき合わせて座るといった文化はここで生まれたのです。

同じ時期には、学問や美術工芸といった文化的な行為とかかわりの深い「座敷飾り」と総称される室内の設備も誕生しました。「付書院つけしよいん」は窓が付いた備え付けの机で、読書や書き物に使われました。「柵」と「押板」や「床とこ」は、工芸品や絵画を展示するために用いられました。

戦国時代が終わり江戸時代を迎えるころには、付書院・柵・床が設けられた部屋は「床の間」とこのま」と呼ばれ、床の間をもつ建築の形式「書院造」は、戦国の覇者となった武士たちが競って建設しました。床の間は接客や家族の生活空間として、普通の住まいの中にも浸透していきます。



床の間

4 様々な住まいの文化

寝殿造や書院造で生まれた習慣や文化は、現代にまで受け継がれています。しかし、それとは別系統の農家・町家・武士住宅の方が、私たちにはより身近な住まいと言えるでしょう。

(1) 農家

農家は、地方によって形態が異なりますが、関東平野では茅葺きの屋根に土塗壁の素朴な外観のものが多くみられます。室内の間取りの特徴は、大きな土間とそこに隣接する板敷の大きな土間をもつことです。

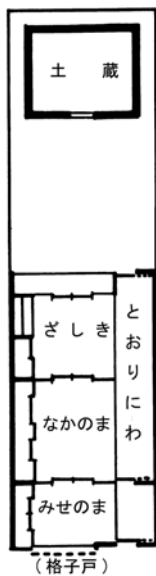
土間は、農作物の加工や種物の保管などの農作業の他、煮炊きなどの水仕事に用いられ、牛馬の飼育もここで行われていました。土間に隣接する広間には囲炉裏が設けられ、就寝以外の生活の場でした。



茅葺屋根の農家
 (「北村家住宅」川崎市立日本民家園)

(2) 町家

町家は、商業や手工業に従事した町人が暮らしていた住まいです。町家の敷地は、「鯉(うなぎ)の寝床」と形容されるように、道に面した正面間口は狭く奥行きが長い構造となっています。間取りは、家の片側に寄せて「とりにわ」と呼ばれる細長い土間を設けて敷地奥への通路や炊事場などに使い、とりにわに接するよう「二・三」の部屋を設けています。とりにわをもつ町家は、京都などには今も数多く残っています。正面道路側に面した部屋は「みせのま」と呼ばれ、商業店舗や作業場として用いられていました。東京近郊でも、正面側に土間を設けるものや、二階建てで一階を店舗や工場、二階を生活の場とする近代の町家が見られます。



町家の間取り



農家の広間
 (「北村家住宅」川崎市立日本民家園)



近代町家の外観

(「台東区下町風俗資料館付設展示場(旧吉田屋酒店)」)



近代町家の土間とみせ

(「台東区下町風俗資料館付設展示場(旧吉田屋酒店)」)

(3) 武士住宅

武士住宅は城下町に多く見られました。広い敷地に塀や生け垣で囲って庭を設け、門を開いて出入りしていました。農家や町家と比較すると土間が小さく、畳を敷き詰める部屋が連続し、床の間をもつのが特徴です。武士住宅のような住まいは、後に「庭付き二戸建て」と呼ばれるものの原型となりました。

以上のような住まい建築は、今なお新しく作られることもありません。これに「nLDK」タイプの現代住宅を加えたものが、現代の住まいと違ってよいでしょう。

学習課題1 江戸・東京に見られた住まいを調べましょう

小金井市の「江戸東京たてもの園」には、江戸時代から昭和初期までに建てられた様々な庶民住宅が移築されています。これらの住まいは、移築される以前は、どこにあったのでしょうか。また、どのような人がどのような暮らしをしていたのでしょうか。具体的な生活を想像しながら、グループごとに調べて発表しましょう。

さらに、視野を広げて世界中の住まいについても調べてみましょう。

学習課題2 日本の住まいにおける「結界」について調べましょう

- ・ 結界とその由来
- ・ 日本建築における結界
- ・ 神社・寺院における結界
- ・ 茶道における結界
- ・ 生活や作法上の結界

参考文献・資料

- ・ 太田博太郎『新訂図説日本住宅史』、影国社、昭和三十五年(一九五〇)
- ・ 太田博太郎監修『日本建築様式史』、美術出版社、平成十一年(一九九九)
- 九)
- ・ 平井聖『図説日本住宅の歴史』、理工学社、昭和五十五年(一九八〇)
- ・ 藤井恵介・玉井哲雄『建築の歴史』、中央公論新社、平成十八年(二〇〇六)

7 文化としての日本の音

1 学習目標

身の回りや地域の音を探し、これを再構成する活動を通して、文化としての日本の音の特徴やよさを理解するとともに自分たちを取り巻く音文化、音環境の在り方をとらえ直す。

2 学習内容

- (1) 日常生活の音と文化や社会の中の音
- (2) 音環境の昔と今
- (3) サウンドマップ・サウンドインスタレーションの作成と発表

1 音環境と私たちの生活

目頃私たちは、様々な音に囲まれて生活しています。朝、鳥の鳴き声で目を覚ましたり、虫の音に季節を感じたりしたことがあるでしょう。噴水の音や風鈴の音などは、暑い日にも涼やかさを運んでくれます。また、道路で激しく鳴らされるクラクションは、私たちの身に危険が迫っていることを知らせてくれます。市場や商店街など、人々の集まる場所には、様々な音がこだまし、時には歌かと思われるような抑揚のついた声が聞こえてくることもあります。

また、音は一定の約束事に則って、合図としての役割を果たしてい

ます。身近なところで言えば、授業の開始と終了を知らせる学校のチャイムがそうですね。電車の発車ベルや信号機のアナウンス音も、一種の信号音です。最近ではあまり見かけなくなりましたが、時刻を知らせる「時の鐘」や火事を知らせる「半鐘」なども、人々の生活に一定の役割を果たしてきました。

このように私たちは、身の回りにある多種多様な音を、意識的にあるいは無意識的に聞いています。そして、そこから何かを感じたり、情報を得たりしているのです。それと同時に、自分たちも様々な音を発し、他者に影響を及ぼしています。「こつした音のやり取りを「環境」としてとらえ直して、そこから様々な問題を発見していきましょう。

2 日本の文化と音

昔から日本人は、自然の音や環境の音を生活の中につまみ取り入れ、機能性と情緒性を豊かに調和させてきました。例えば、「ししおどし」は本来、田畑を荒らす鳥獣を音で追い払うためのものですが、現代では竹が石を叩く（たた）音と水を楽しむために、日本庭園の装飾として設置されています。また「水琴窟」は江戸時代、庭師などによって各地につくられたもので、排水という機能に、美しい音を楽しむという風情が加味されています。相国寺（京都）法堂の「鳴き籠」や「ウグイス張り」と呼ばれる寺院の渡り廊下のように、建築物の構造とかわって生じた響きから、自然や超自然を感じ取っている場合もあります。つまり、私たちは様々な音と出会うとき、その背後にある「しずかさ」や情緒、あるいは超自然に対する畏（おそ）れなどをも同時に感じているということでしょう。

このことは、詩歌からも読み取ることができます。松尾芭蕉の「閑

(しずか)さや若にしみ入(い)る蝉の声」はあまりにも有名ですが、そのほかにも「すず風や力いっぱいきりぎりす」(小林一茶)や「いづくにかしるしの糸はつけぬらむ年々」としどし(来嶋(きな)くつばくらめかな」(樋口一葉)など、虫や鳥の声に風情を感じて詠まれた俳句や短歌が、数多く残されています。

しかし、ある一つの音が、すべての人に同じような感覚を引き起こすわけではありません。例えば、蝉時雨を聞いて強烈な感情をかき立てられる人がいる一方で、蝉の生息しない国や地域の人々にとっては雑音にしか聞こえないという報告があります。音に対する感性は、環境と個人の経験に強く影響されて形成されるものなのです。

3 音環境の昔と今

日本人の音に対する豊かな感性も、時代の移り変わりとともに変化してきているようです。その要因の一つになっているのが、経済発展に伴う消費活動の変化です。かつては、町のあちこちに、豆腐や竿竹(さおだけ)などの物売りの声が響いていましたが、現在では少なくなりました。また、家屋構造の変化は遮音性の追究へと向かい、音の発生と残響の在り方に変化を生じさせています。

さらに現代社会では、街の至る所で音や音楽が氾濫し、好むと好まざるとにかかわらず、バックサウンドやBGMが耳に飛び込んでくるため、集中して聴くという感覚が鈍化しがちです。その一方で、携行型のオーディオ機器の普及から、自分の好きな音や音楽を持ち運び、それに浸ることが可能になりました。このことから、音を通じたコミュニケーションの意味が、今大きく変わろうとしています。

このように音環境が激変する現代において、音を窓口として様々な

問題に向き合うことは、重要な意味をもっています。さあ、目を閉じて身の回りの音に聴き入ってみましょう。どのような音が聞こえてくるでしょうか。その感じやそこから思い浮かんだ光景を、絵や図形などで書き留めてみましょう。どのような問題が浮かび上がってくるでしょうか。

学習課題1 身の回りの音、地域の音の問題を探りましょう

(1) 資料の収集

自分たちの学校や地域は、どのような音環境の特徴をもっているのでしょうか。事前調査として、図書館や公共施設の統計資料、また過去の新聞記事などをもとに調べてみましょう。さらにインターネットを用いて、現代社会全般の問題点や各地の課題などを検索し、自分たちの地域の実情と比較してみましょう。

(2) テーマの決定

事前調査で得られた情報に基づき、音の問題を探るテーマを決めましょう。その際、調べる目的と内容が一致しているか、また限られた時間内に作業を完成させられる規模であるか、などについても検討しましょう。

テーマの例

- ・ 残したい 高等学校の音風景
- ・ 音で綴(つづ)る 町の今と昔
- ・ 音の環境問題を考える

学習課題2 インタビューやアンケートをして音環境の今と昔につ

いての情報を集めましょう

(1) インタビューの計画と実施

家族や先生、友人あるいは先輩など、身近な人にインタビューを行い、人々の心の中でどのような音が響いているのかを探ってみましょう。このとき、できる限り具体的な音を想起してもらい、擬音や比喩を用いて音の質感を再現してもらうようにします。会話は、メモをとるとともに録音をし、後でテープ起こしをします。文章ができたなら、回答者に内容の確認をとりましょう。

なお、インタビューを録音することについては、あらかじめ了承してもらう必要があります。

(2) アンケートの計画と実施

インタビューを通して浮かび上がった課題をもとにアンケートを作成して、より多くの人から意見を集めることもできます。回答しやすいように選択肢を用意しておく、集計するとき便利です。対象と人数を計画して、アンケートを実施しましょう。得られたデータは、必要に応じて、表やグラフにして整理しておきます。

インタビューやアンケートを行うときの注意

協力してくれる相手に対して、調査の目的をはっきりと伝えましょう。また、調査によって得られた個人の情報を、他の目的で使用してはいけません。

高校の音風景についてのアンケート

年齢()性別()

- 質問 1 高の音で最も好きなものはどれですか。
- ア 朝のあいさつの声
イ 校庭に響く野球のバット音
ウ 放課後のプラスバンドの音
エ チャイムの音
オ その他()
- 質問 2 最も 高らしい音は何だと思いますか。
- ア 朝のあいさつの声
イ 校庭に響く野球のバットの音
ウ 放課後のプラスバンドの音
エ チャイムの音
オ その他()
- 質問 3 高校の音で、今後も残してほしいものがあつたら、自由にお書きください。
()
御協力ありがとうございました。

〔アンケート例〕

学習課題 3 テーマに沿って身の回りの音を記録しましょう

学習課題 2 で得られたインタビューやアンケート結果に沿って、身の回りの音を記録してみましょう。

記録するために、まず録音の計画を立てましょう。録音する前に、録音場所に危険がないかどうか、録音の許可を得る必要があるかどうかなどについても注意しましょう。

録音には、集音マイクを用意し、できるだけ録音したい音だけ拾うようにします。記録には、カセットテープよりも、MDやICレコーダーなど、デジタルの機器を使用した方が、編集作業が容易になります。録音し終えた記録媒体には、録音の日時、場所、内容の一覧をメモしておきましょう。

学習課題4 調べたことを発表しましょう

(1) 音の情報の分析

収録した音を、強さ、種類、頻度、位置、質感などの観点から分類しておきます。

(2) サウンドマップの作成

音から得られた印象を、二次元平面上に図や文字などで表記したものを、サウンドマップといいます。ポイントになる音を中心に、音がどこで、どのように聞こえる(聞こえた)のかを、テーマに沿って地図上に示してサウンドマップを作成しましょう。

また、コンピュータのソフトを活用して地図を作成し、音源とリンクさせることによって、音の出るサウンドマップを作成することもできます。

音の質感を大切にして、地図を見た人が、その音を思い浮かべられるように工夫してみましょう。



サウンドマップ

大阪市立大学院・2年

岩井茉莉江さん作「南大東島」)

(3) サウンドインスタレーションの作成

サウンドインスタレーションと

は、身の回りにある音や加工した音・音楽などを手掛かりにして物を配置し、三次元の空間全体を作品とする、現代アートの表現形態のことです。自分たちで作ったオブジェや様々な物を空間に配置し、更に音の再生装置を埋め込むことによって、より立体的な音の世界を再構築することができます。



サウンドインスタレーション
(東京芸術大学1年生・須藤崇規さん
「autonomic sound sphere」)

【発展学習】

1 音環境のデザインを通して、地域の様々な活動に参加してみましょう。

2 能などの伝統文化で、音響効果がどのように工夫されているのかを調べてみましょう。

〈参考文献・資料等〉

- ・岩宮沢一郎『音の生態学 音と人間とのかわり』コロナ社、平成十二年(二〇〇〇)
- ・R・マリー・シエーファー『サウンド・エデュケーション』鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳、春秋社、平成四年(一九九二)
- ・山岸美穂・山岸健『音の風景とは何カーサウンドスケープの社会誌』日本放送出版協会、平成十一年(一九九九)

8 江戸・東京を歩く

1 学習目標

江戸城を中心とした江戸と現代の東京の町の構造を比較し、東京の歴史や都市の環境文化について理解する。

2 学習内容

- (1) 都市の移り変わりと環境
- (2) 災害と復興からみる変化
- (3) 江戸時代から残る地名の調査
- (4) フィールドワークを生かした、名所・百景をめぐる散策コースの策定

1 江戸から東京へ

私たちが住む東京は、かつての江戸城の城下町でした。江戸城は、長祿元年（一四五七）に太田道灌（おおたどうかん）によって築かれましたが、後に徳川家康が江戸で幕府を開いたことから、江戸は都市として飛躍的に発展していくこととなります。



慶長江戸図

(東京都立中央図書館 東京誌料文庫所蔵)

十七世紀初頭、およそ十五万人だった江戸の人口は、十八世紀初めには百万人にふくれあがりました。この人口は、当時から既にヨーロッパで最大の都市であったロンドンやパリを上回る規模です。江戸が世界最大規模の都市に発展したころ、江戸に住む人々の間で「大江戸」という言葉が使われ始めたと言われています。人々や物資が集まる都市・江戸では様々な文化も花開きました。

明治維新によって江戸は「東京」と改称され、文明開化とともに急速に近代化していきます。その後、関東大震災や戦災に見舞われ、その復興とともに街並みは大きく変貌しましたが、今なお東京は日本の首都として、また世界に有数の国際都市として発展を続けています。

学習課題1 地図を使って江戸・東京の移り変わりを調べてみましょう

(1) 古地図からみる変化

古地図を使って、江戸の町の構造を調べてみましょう。また、大阪や京都の構造と比較して、江戸の町の特徴を話し合ってみよう。

さらに、ロンドンやパリなどヨーロッパの都市構造とも比べてみましょう。



武州豊嶋郡江戸庄図

(東京都立中央図書館 東京誌料文庫所蔵)

(2) 災害と復興からみる変化

「火事と喧嘩（けんか）は江戸の華」と言われたように、江戸では火災が頻繁に起こり、時には大火にも見舞われました。火災の他にも、地震や洪水などの自然災害によって、江戸は大きな被害を受けました。しかし、それらの災害からの復興は、江戸の町がより整備され、拡大していく契機でもありました。災害を受けた江戸、また東京がどのように復興を遂げ、今日の姿になったのでしょうか。古地図や地図に描かれた町の様子を比較しながら調べてみましょう。

	年号	主な出来事と災害
一四五七	長祿元	太田道灌が江戸城を築く
一五九〇	天正十八	徳川家康が江戸城に入る
一六〇三	慶長八	江戸幕府が開かれる
一六五七	明暦三	明暦の大火
一八五五	安政二	安政の大地震
一八六八	慶応四	江戸を東京と改称。東京府開庁
一八六九	明治二	太政官、東京遷移布告
一八七一	明治四	廃藩置県により旧・東京府を廃止し、東京府を更置
一九二二	大正十二	関東大震災
一九四三	昭和十八	東京都市実施
一九四五	昭和二十	東京大空襲

(3) 江戸時代から残る地名を探る

現在の東京には、江戸時代に名付けられた地名が残っています。それらの地名にはどのような由来があるのか、調べてみましょう。

(4) フィールドワークからみる変化

現在の東京の地図と古地図とを見比べながら、興味をもった町や自分たちの住んでいる地域を歩き、町の変遷について理解を深めましょう。

コラム 江戸しぐさ

都市で暮らすための知恵の一つに「江戸しぐさ」があります。道ですれ違ふときに肩がぶつからないように、お互いが右肩を引く「肩引き」。雨の日にすれ違ふときに、しずくがかからないようにお互いが傘を外に傾ける「傘かしげ」。こぶしをついて腰を浮かせ、後から船に乗る人のための席を確保する「こぶし腰うかせ」。これらの「江戸しぐさ」は、江戸の商人たちが一人前の商人を目指すための心構えとして、「商人しぐさ」「繁盛しぐさ」とも呼ばれました。「江戸しぐさ」は、人々で賑わう都市で共に気持ちよく生きるために築き上げられてきた知恵と言えるでしょう。互いを思いやり、人間関係を円滑にする江戸しぐさは、私たちが現在暮らす東京でも生かすことができます。様々な「江戸しぐさ」を調べ、実践してみましょう。

2 江戸の名所、東京百景

江戸の町は「江戸名所図会」や「名所江戸百景」「絵本江戸土産」などに描かれました。そこには当時の町の様子や人々の動きはもちろん、日本の自然や季節の風物詩と共に江戸の町が描かれています。

また東京となつてからも、町の様子は「新撰東京名所図会」や「東京名所図」などに描かれ、写真などにも残されてきました。描かれ、また撮影されて残されてきた資料から江戸から東京への移り変わりを知ることができます。



『江戸名所図会』第1巻
(東京都立中央図書館 加賀文庫所蔵)

学習課題2 私たちの住む東京の名所・百景を選びましょう

(1) 江戸や東京の町の名所や景観を取り上げた浮世絵や絵画、写真を基にして、町がどのように変化したかを調べましょう。また描かれている人々の動きや服装についても変化の様子を調べ、まとめてみましょう。



明治25年の日本橋
(『Sights and scenes on the Tokaido』Murdoch, James
明治25年(1892) 国立国会図書館蔵)

(2) 現在の東京都の名所・百景、また自分たちの住んでいる地域の名所・百景を選び、写真で撮影しましょう。撮影した写真はそれぞれコンピュータで編集して、CDなどにまとめ、発表会を開きましょう。

(3) 江戸・東京の町の変遷を調べて歩いたフィールドワークの結果も取り入れ、名所・百景を巡る散策コースをまとめましょう。

(4) 平成二十三年に、第二東京タワー（仮称）の建設が予定されています。タワーから展望できる東京の町並みを想像し、江戸時代に作られた鳥瞰図（ちようかんず）と見比べてみましょう。

【発展学習】

- 1 江戸城が築かれる以前の江戸・東京の歴史を調べてみましょう。
- 2 東京の位置する地理や地質学的な視点から、現在の東京が抱えるヒートアイランド現象などの環境問題や自然災害への備えについて考え、対策の知恵について話し合ってみましょう。

《参考文献》

- ・白石つとむ編『江戸切絵図と東京名所絵』小学館、平成五年（一九九三）
- ・吉原健一郎ほか編『江戸東京年表』小学館、平成十四年（二〇〇二）
- ・越川禮子『身につけよう江戸しぐさ』ロングセラーズ、平成十六年（二〇〇四）
- ・『江戸・関東の城下町』（太陽コレクション）平凡社、平成十年（一九九八）

コラム 日本の歳時記

『名所江戸百景』の「水道橋駿河台」では、江戸の空を泳ぐ鯉（こい）のぼりが描かれています。現在の東京でも、お正月、桃・端午の節句、七夕、お盆、お月見、年越しなどの季節折々の年中行事や、七五三、成人式、結婚、還暦や古希などの人生の祝いなどでは、飾り付けや古くからの慣習を行うなど、日本の伝統・文化が今も息付いています。



歌川広重「水道橋駿河台」『名所江戸百景』
（国立国会図書館所蔵）

9 和の響きを聴く

1 学習目標

音・音楽が日常にあふれる現在にあって、郷土の音楽や伝統芸能に関心をもち、季節・空間・機会などに即したそれぞれの「聴き方」を探り、その特徴にふれることを通して、「和の響き」の魅力を味わうことを目標とする。また、江戸 東京の生活の中で、様々な音楽が果たしてきた役割や意味を考える。

2 学習内容

- (1) 身の回りにある「和の響き」
- (2) 郷土の音楽や伝統芸能の魅力
- (3) 郷土の音楽や伝統芸能の歴史的・文化的な意味

1 「和の響き」とは

音・音楽は、もともと特定の時代や地域の生活と密接に結び付いて生まれ、伝えられてきたものです。すなわち、音・音楽は、それぞれの時代や文化を背負っているということが出来ます(フ、「文化としての日本の音」参照)。

ところが、ルーツの異なる古今東西の様々な響きがあふれる今日では、そうした本来の在り方とは別に、コンサートホールやライブハウスでの演奏、放送・CD・インターネットなどのメディアを通して、様々な音楽を聴いたり楽しんだりすることが出来ます。そうした中で

は、ともすれば、これまで大切にされてきた生の音楽と人間、生活とのかかわりが軽んじられる傾向も見受けられます。

ここでは、人間が奏でる生の音・音楽、とりわけ「和の響き」にこだわり、それらがどのように生まれ、伝えられ、聴かれてきたのかを、調べたり体感したりしてみましよう。

今日、「和の響き」とされているものの中には、かつては純然たる外来音楽であったもの、音楽は国産でも楽器は外来楽器であったもの、昔も今もある特定の地域だけに伝えられているもの、特定の地域で生まれた音楽がある時期に全国に広まったものなどが混じり合っています。十六世紀半ば頃、日本本土に伝来し、その後数々の改造が施された三味線は別格としても、今日、和楽器の代表と考えられている箏(そう)、尺八や琵琶(びわ)のいずれもが、中国から伝来した楽器でありながら、日本国内でそれぞれオリジナルな音楽が創り出され、今日まで伝えられてきたことは、日本の伝統・文化を考える上で重要です。



平家琵琶

(東京芸術大学美術館収蔵)

学習課題1 和の響きを聴いてみましょう

様々な和の響きを聴いてみましょう。また、日常生活において、いつ・どこで・どのよう和の響きにふれることができるのかを考えてみましょう。

2 東京の郷土の音楽

明治になって日本の首都となった東京は、将軍のお膝元であった江戸・東京という特別な都市空間に根差した音楽と、特に明治以降、東京が情報・文化の中心的な集積・発信地になったために、東京を経由して全国に広がった新しい音楽とが交錯する地になったのです。

東京都の郷土の音楽を考える場合、少なくとも、江戸から東京市に引き継がれた都市空間の音楽、昭和七年（一九三二）に東京市に組み込まれた周辺の郡部、多摩地域、伊豆諸島など島しょ部の音楽という二つに区分する必要があります。今日の巨大都市・東京からは想像しにくいことですが、関東大震災とそこからの復興を契機に郊外地を組み入れて「大東京」が成立する前の東京市は、ごくごく狭いエリアであり、音楽に関しても、東京の市中とそこを一步出た周辺の郡部とでは全く違う様相を見せていました。（12 モダン都市東京の生活文化「参照」）。

江戸を直接引き継いだ小さな東京の中には、音楽・芸能の実演や、素人・玄人への教授（稽古）を職業とする人々が非常に数多く存在していました。江戸・東京の音楽は、こうした人たちの存在を抜きにしては考えられないといえます。

明治になって、特に下町地域においては、「常磐津（ときわす）」「清元（きよもと）」（共に歌舞伎の舞踊曲として発達した浄瑠璃（じょうりゆ）の一つ）、「長唄（ながうた）」（歌舞伎の舞踊曲として発達した三味線音楽）など、江戸ではごくまれた三味線音楽や踊りの稽古がきわめて盛んでした。

一方、江戸・東京を取り巻くかつての郡部や多摩地域では、これとはまるで異なる音楽が行われていました。現在まで残る地域の祭礼に

は、地元の人々によって囃子の保存会などが結成されているところも多く、交通手段の発達によって通勤圏内に入るようになっても、江戸・東京とは違う郷土の音楽や芸能を見出すことができます。また、伊豆諸島をはじめとする島しょ部には、独自の音楽や芸能が残されていますが、現在は生活全般が変化し、存続が危ぶまれているものもあります。

3 「和の響き」の聴き方

では、和の響きを代表する伝統音楽をいくつか選び、その概要を理解するとともに、鑑賞する楽しさを味わってみることにしましょう。

音楽は、演奏される場所や時期、聴き手などによって自ずと響きが変わる特色をもっています。もともとのような場所や時期に演奏

されていたのか、現在ではどのような新しい演奏の機会が生まれているのかなどについて合わせて調べてみることにしましょう。

以下に、「雅楽（ががく）」、「能楽（のうがく）」、「箏曲（そうじきょく）」



を取り出し、その概要を示しますが、学校やクラスの実態に応じて、学習対象の選択を工夫しましょう。

(1) 雅楽

雅楽というと、「宮中の音楽」「神社の音楽」というイメージがまだ強いようですが、今日の東京では、雅楽は宮内庁楽部の公開演奏会、国立劇場や音楽ホールでのコンサートなどで聴けるほか、日程を確かめれば神社での「舞楽(ぶがく)」「(雅楽の伴奏で舞を舞うもの)奉納なども見ることが出来ます。

雅楽は、奈良時代までに伝来した東アジア諸国の楽舞と、それ以前から存在した固有の起源をもつ歌舞を、平安時代に整理・改革したものが源流となっています。これに、平安時代に作られた歌謡(催馬楽(さいばら)・朗詠(ろうえい))が付け加わりました。多種類の管・弦・打楽器の合奏音楽であること、絶対音をもつ音楽であること、中国から伝わった音楽理論用語が豊富なこと、古い楽譜や楽書がたくさん残っていることなどが、日本の音楽の中でも雅楽のもつ際立った特色です。

江戸時代には、京都・奈良・大坂(天王寺)に三方楽人(さんぼうがくにん)とよばれる専門家集団がいて、宮廷行事での雅楽を担当していました。これに対して徳川幕府は、日光や江戸城内に楽人を置きましたが、將軍家の大掛かりな法会には、関西から三方楽人を呼び寄せ、日光や江戸城内で舞楽を演じさせました。しかし、江戸の庶民にとっては、雅楽はほとんど耳にすることのない、ごく珍しい音楽だったと言えます。

明治時代になると、今日の宮内庁楽部の前身である雅楽局とい

う役所がつくられ、三方楽人の大半は東京に転勤し、東京を中心に様々な儀式での雅楽の演奏を担当することになりました。同時に、博物館や博覧会でのアトラクション、外国からの来賓のもとにも、舞楽が演じられたのです。また、二十世紀にさしかかる頃からは、神社の儀式音楽にも雅楽が取り入れられていきました。戦後は、新曲が作られたり、古譜に基づく復曲が行われたり、現代の様々な音楽とのコラボレーションも行われ、儀式音楽としてだけではなく、室内で音楽として楽しむ聴き方が広がり、雅楽を稽古する人口も増えました。



笙(しょう)
(東京芸術大学美術館収蔵)

学習課題2 雅楽の演奏を聴きましょう

雅楽の演奏を聴いて、各楽器の音色の特徴や合奏の中での役割を感じ取りましょう。

(2) 能楽

江戸時代に、徳川幕府の式楽（しきがく）（儀式に用いる音楽芸能）となった能楽（能と狂言）は、武士には最も身近な音楽でした。一方、江戸の庶民が能楽上演を見られるのは限られた機会でしたが、能の声楽だけを取り出した謡（うたい）の稽古は広く行われていました。

明治時代になると、幕府の保護がなくなったため、能楽は一時期大変な困難に陥りますが、徐々に復活を遂げます。もとは野外に設けられていた能舞台が客席まですっぽり屋根で覆われ、現在の能楽堂のような形が生まれたのもこの時期以後のことです。能を形づくる謡や仕舞（しまい）、囃子（はやし）などの稽古も盛んになりました。囃子は、能管（のうかん）と呼ばれる笛、小鼓（こつづみ）、大鼓（おおつづみ）、太鼓から構成されます。

近年では、能楽のワークショップも数多く行われていますので、能楽の実技を集中して経験することができます。また、夏のイベントとして各地で薪能（たきぎのう）（夜、薪の火を明かりの助けとして行われる野外能）も行われるようになり、通常の能楽堂での催しとは一味違う上演を楽しむことができます。



学習課題3 能楽について調べ、鑑賞しましょう

能楽は、劇と舞と音楽が一体となった総合的な芸術です。舞台や能面、装束も含めて、興味・関心のある視点から調べたり、実際に能楽を鑑賞したりしましょう。

(3) 箏曲(そうぎょく)

現在、東京には生田流と山田流の箏曲が並存していますが、明治以前に江戸で箏曲といえは、十八世紀末に山田検校(けんぎょう)が始めた山田流箏曲がほとんどでした。明治になって、関西や九州から生田流の箏曲家が上京し、東京でも生田流の箏曲が聴かれるようになったのです。

山田流箏曲は、箏を主奏楽器としていますが、歌の比重がひじょうに高いことが特徴で、対する生田流は、地歌(じうた)と呼ばれる三味線音楽との関係が深く、どちらかといえば器楽優位であることを特徴としています。また、爪は、山田流では丸爪(まるづめ)、生田流では角爪(かくづめ)を用い、箏に対して座る角度(山田流は楽器の正面を向いて座り、生田流は斜めに座る)も違います。

明治時代以降、箏曲は家庭音楽として普及したことから、時代の新しい影響を敏感に受け止め、新しいレパートリーの開拓が最も盛んに行われました。十三弦の箏による古典曲の伝承は今も大切にされていますが、他の邦楽に比べて大正期以降に作られた新曲や戦後の現代的な器楽曲もレパートリーの重要な部分を占めています。あわせて、十七弦箏や二十弦箏といった多弦箏が開発され、合奏の幅を広げた独奏楽器としての機能が高められました。伝統的な座奏のほかに椅子に腰掛ける立奏も行われることなど、また絹弦に代えて合成繊維のテトロン弦が広く使われていることなど、他の和楽器に比べて楽器の取り扱いも柔軟に変化させてきたといえます。そのために、箏は学校の教育現場でも広く使われるようになっていきます。



山田流(写真提供 萩岡松韻氏)



生田流

学習課題 4 箏の特性を味わいましょう
古典の作品や現代曲を聴いて、楽器としての箏の特性を感じ取ってみましょう。また、奏法の多様性や弾き歌いの面白さも味わってみましょう。

10 祭りの魅力

1 学習目標

江戸から東京という歴史の流れの中で、脈々と受け継がれてきた祭りを取り上げ、祭りのもつ意味や魅力、祭りに対する地域社会の人々の思いや心意気などを探る。さらに、祭りに携わる人々と交流したり、実際に祭りに参加して神輿（みこし）を担いだり、お囃子（はやし）を演奏したりする体験を通して、地域社会にはぐくまれてきた伝統・文化を学ぶ。

2 学習内容

- (1) 江戸・東京と受け継がれてきた祭りの歴史と概要
- (2) 地域の祭りの魅力
- (3) 祭りに生きる人たち

1 江戸・東京と受け継がれてきた祭り

江戸幕府が開かれて既に四百年以上が経過しました。町の発展とともに独自の伝統文化がはぐくまれ、それらは江戸・東京を通して脈々と受け継がれてきています。「祭り」もその一つです。各地域社会にしっかりと根付いた様々な祭りは、信仰的な儀礼でありながら、毎年特定の日に繰り返される周期的な「年中行事」として位置付けられ、季節の風物詩ともなっているのです。



神幸祭の鳳輦（ほうれん）神輿（神田祭）

(1) 三社祭、神田祭、山王祭

数ある江戸・東京の祭りの中でも、浅草の三社祭、神田祭や山王祭は特に有名です。

百基余りの神輿（みこし）が圧巻の三社祭り（浅草神社）は、現在、東京で最も規模の大きな祭りといえるでしょう。五穀豊穣を祈願して行われる華麗な「びんざさら」は、東京都の無形民俗文化財に指定されています。鳶頭（とびがしら）の木遣り（きやり）、びんざさら、囃子（はやし）屋台などが練り歩く行列もまた、三社祭



神輿宮入（神田祭）

になくなくてはならないものとなっています。

また、神田神社（通称：神田明神）の神田祭と日枝神社の山王祭は、江戸時代、豪華な山車（だし）が江戸城内にまで入って、將軍らに披露されたため、「天下祭」あるいは「御用祭」と称されました。この二つの祭りは、十七世紀後半より、本祭りが隔年ごとに交互に行われるようになったといわれています。

それぞれに趣向を凝らされた山車に囃子や踊りが付いて練り歩

く天下祭は、他の祭りにも大きな影響を与えました。明治に入ると、市中の電線が邪魔になって山車が通行できなくなり、代わって各町内からくり出す神輿が有名になりました。

二〇〇三年には、江戸開府四百年を機に、「江戸天下祭」が復活を遂げました。

② 祭りと音楽

祭りになくてはならない音楽として、祭囃子（まつりばやし）があります。全国的には、山鉦（やまぼこ）の上で太鼓、鼓、鉦（かね）、笛などで演奏される京都の祇園囃子が有名ですが、東京近辺にも伝統的な祭囃子が継承・発展されてきています。

なかでも、「葛西囃子」や「神田囃子」は有名です。これらは天下祭（神田祭と山王祭）に加わるようになって発展し、山車の流行とともに各地に伝播（でんぱ）していったといわれています。明治初期には、歌や踊りの入らない演奏のみの素囃子（すばやし）なども整えられました。例えば、神田囃子の場合、楽器の編成は篠笛一、締め太鼓二、大太鼓一、鉦（かね）一の五人囃子となっています。江東区深川の木場では、水上の角材に乗って曲芸を披露する「角乗（かくのり）」が伝承されていますが、ここでは、半纏（はんてん）を着た演者が、葛西囃子に合わせて演技を行います。

学習課題 1 祭りについて調べてみましょう

現在に受け継がれてきている様々な祭りの中から、興味のある祭りを選んで、その歴史や特徴などを調べてみましょう。また、祭囃子についても調べてみましょう。

2 地域社会の祭りの魅力

地域社会に根付き、長く受け継がれてきた祭りには、今なお人々を引き付ける魅力があります。そうした地域社会の祭りには、祭りを大切に受け継いできた地域社会の人々の思いや願い、生活と結び付いた知恵などが込められています。

学習課題2 地域社会の祭りの魅力を探ってみましょう

みなさんの住んでいる地域社会には、どのような祭りがありますか。地域社会の祭りで興味があるものを取り上げ、次の点を調べてみましょう。

(1) 祭りの歴史

郷土史などを手がかりに、祭りの起源や歴史、またその特徴を調べてみましょう。

(2) 祭囃子、神輿や山車

祭囃子

・楽器編成

・衣装や装束

神輿や山車

・神輿や山車に施されている装飾

・神輿を担ぐとき、山車を引くときのかけ声

(3) 祭りに携わる人々へのインタビュ―

地域の祭りを支える人たちが担っている役割や祭りの中での役職にはどのようなものがあるか。

祭りはどのように準備されていくか。

人々が祭りに対して、どのような思いを抱いているか。

祭りにはどのような技や知恵が見られるか。

(4) 地域社会の祭りに参加して、神輿担ぎや祭囃子の演奏を実際に体験しましょう。

(5) (1)から(4)をまとめて、祭りをはじめとする地域社会の伝統・文化の継承と発展に自分たちがどのように関わっていくことができるか、話し合ってみましょう。

〈参考文献・資料〉

- ・星野紘・芳賀日出男監修、全日本郷土芸能協会編集『日本の祭り文化事典』東京書籍、平成十八年(二〇〇六)
- ・竹内誠監修『入門 おとなの江戸東京ドリル』(地球の歩き方特別編集)ダイヤモンド社、平成十八年(二〇〇六)

「リズム 生活のリズムの基本となっていた「時の鐘」

江戸時代においては、時刻を知らせる手段として寺社の「時の鐘」が用いられていました。例えば、一七二六年には、上野寛永寺、市ヶ谷八幡、赤坂円通寺、芝増上寺の四か所の時の鐘が、順に時刻を報じ始めるようにと定められました。江戸の発展とともに、時の鐘の数も増え、現在では計十六の設置場所が確認されているそうです。江戸時代、時刻を報じてきた時の鐘は、人々にとってまさに生活のリズムの基本であり、生活に欠かせないものであったと言えるでしょう。

ところで、儀式に使われる鐘は「梵鐘(ぼんしょう)」と言われ、寺社内に置かれた時の鐘とは区別されていました。歌舞伎においては、時の鐘として「本釣鐘(ほんつりがね)」などと呼ばれる梵鐘や「銅鑼(どら)」が用いられることがあります。

銅鑼は、銅製円盤状で、盆のように縁が付いていて、縁以外はほぼ平らなものから中央部にこぶ状の隆起があるもの、また、いぼ状の隆起を多数作り出したものなどがあります。縁の穴にひもを通し、手にぶら下げるか木の杵などにつるし、銅鑼打ち杵(ばち)で打奏されます。杵は棒の先端が球状に布で包まれ、貝杵(かいばい)とも呼ばれます。『日本音楽大事典』(平凡社一九八九年)では、銅鑼は、「用途は本釣鐘と同じく『時の鐘』であるが、多少時代的で、時を報ずるよりはむしろ音響効果として、さびしい場面に使う」と述べられています。



「銅鑼(どら)」(宮田亮平作)